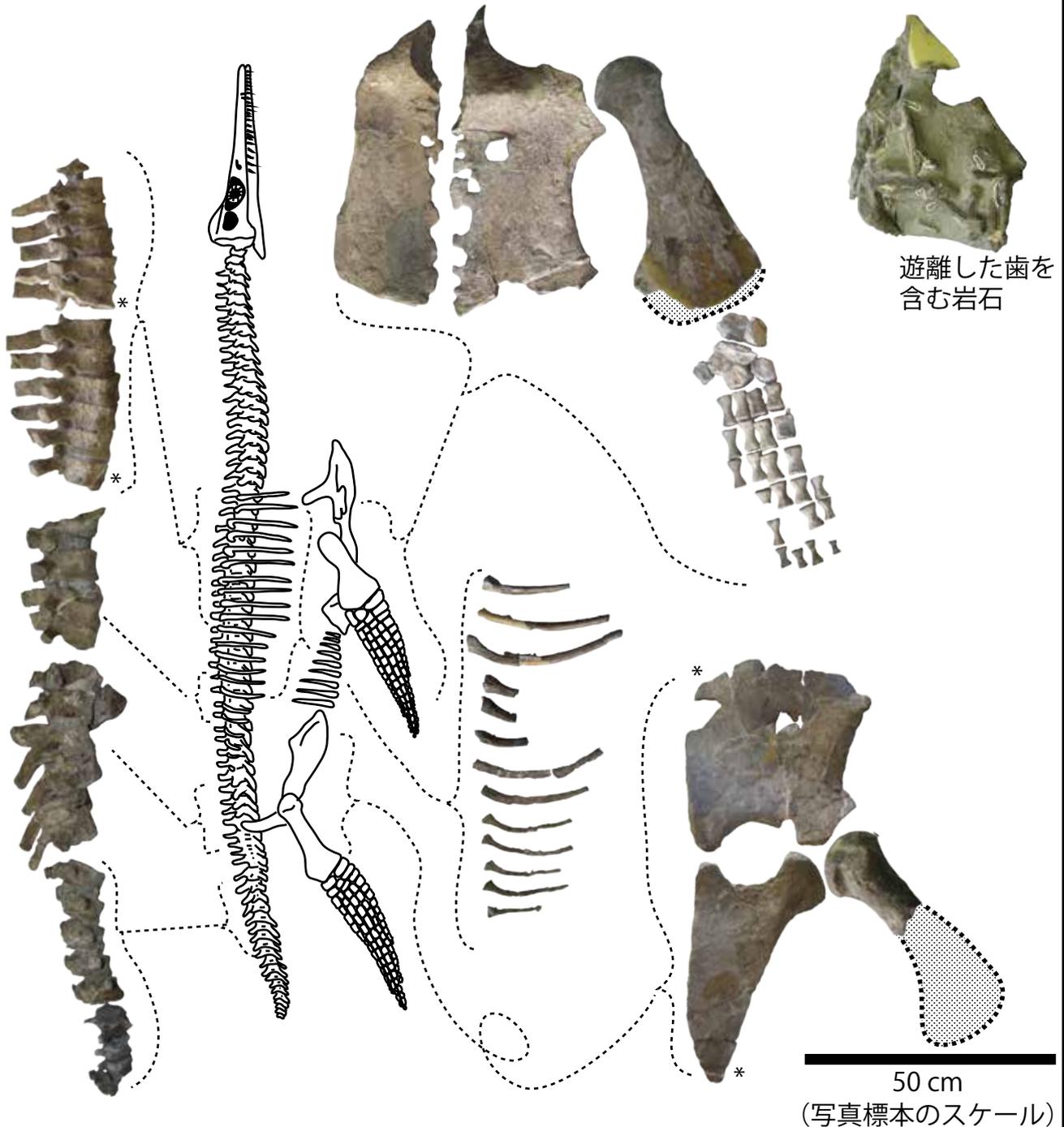




博物館収蔵資料の紹介⑩

首が短いクビナガリュウ；ポリコティルス類③

全身の約5割が保存されている国内最良の標本



標本のおおよその位置関係を示しています。写真で示しているのは、標本の主要な部分のみです。

一部はクリーニング中で、研究中の標本です。展示はしていません。

* 以示した部分は
写真の左右を反転させています。



1993年の発掘の様子
化石周辺の余分な土砂をどけているところ



土砂を小型ポンプで流しているところ

発見 それまでもクビナガリュウやモササウルス標本を発見し、穂別町立博物館に寄贈されていた^{しぎはら}嶋原崇之先生（札幌北高校・教諭）が1993年5月に発見し、採集できた標本の一部を穂別町立博物館に寄贈されました。

発掘 1993年7月末から8月初めの計4日間、毎回約8名ほどが残りの部分の発掘を行いました。発掘は穂別町立博物館スタッフや千歳化石会のメンバーなどが参加しました。1977年のホベツアラキリュウ発掘以来の16年ぶりの大掛かりな発掘として、大きな期待を集めました。発掘には重機も用いられました。尾椎骨が露頭（地層）にあり、残りは周辺の転石として発見されました。

標本の産出部位：胴体部の大部分、ヒレ1つほど、遊離した歯 **全長**：約5 m

産出地：むかわ町穂別長和（おさわ）

地質年代：後期白亜紀（詳細な地質時代は現在調査中）

発掘後の経緯と研究：発掘直後の数年間はクリーニング（化石の整形）作業が進められましたが、調査を担当していた学芸員が退職したこともあり、長い間クリーニング作業が滞っていました。2年ほど前からクリーニングが再開され、あと1年ほどで終了する見込みです。

全身の約5割が保存されているので、日本国内のクビナガリュウ（長頸竜亜目）で有数の標本であることが発掘された時点から分かっていました。

2010年からの佐藤たまき先生（東京学芸大学・准教授）の研究で、この標本は長頸竜亜目ポリコティルス科のものであることが予察的に明らかになってきました。日本で5個体しか発見されていないポリコティルス類標本の中では保存されている部位が極めて多いので、ポリコティルス類としては国内最良で、また日本を代表するクビナガリュウ標本といえます。新種の可能性もあるので、今後の研究が期待されます。

学芸員 西村智弘

[アクセス]



開館時間 9:30~17:00（最終入館 16:30）

入館料 個人/小～高校生：100円

大人 300円

団体/小～高校生：50円

大人 200円

※団体は10人以上 ※小学生未満は無料

休館日

2月

3(月) 10(月)
12(水) 17(月)
24(月)

3月

3(月) 10(月)
17(月) 24(月)
31(月)